
凄腕ハンター千雨

川岸新兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

凄腕ハンター千雨

【Zコード】

Z2233Z

【作者名】

川岸新兎

【あらすじ】

【ネギま × MHP3】

千雨チートSSSを書きたくなつたので本能の赴くまま書いたもので
す。

無論チート成分を含んでおりますので、嫌いな方はクエストリタイ
アしてください。

P3限定なのはそれしかプレイしてないため。
Arcadiaにも投げる。

第1クエスト

靈峰。ユクモ地方の渓流奥地に存在するその場所に、千雨といふ一人のハンターが立っていた。

空は相変わらず青く晴れていて、心地よい風が千雨の髪を揺らしている。今日は珍しく雲一つ見つけられなかつた。

「やっぱり、見間違いだつたんじゃニヤいかニヤ？」

隣で双眼鏡を覗き込んでいた相棒の言葉に同意する。

「どううな。そもそもアマツマガツチみたいなのが何匹もいたら、ここら一帯に人間なんか住めないだろ」

ギルドで聞いた、空を飛ぶ古龍らしき影の田撃情報。その確認をする為に千雨達は三日も前からこの場所でそれらしき存在を探していた。

「だつたら、ニヤんで千雨はこゝから動かニヤいニヤ？ もともとは一泊くらい調査するだけの予定だつたニヤ」

ジト目でこちらを見る相棒。千雨はそひりを見ることなく答える。「見られてんだよ。アマツマガツチじゃねーな。ヤバそうな奴がずっとこっちを觀察してやがる」

「ど、どっちはニヤー…？」

慌てて相棒が双眼鏡を構える。千雨はスッと前方を指さす。

「向こうの姿は確認できない。気が付いたのは、まあ勘だ」

「うー……。千雨の勘つて当たりすぎるから怖いニヤ。逃げ隠れたナルガクルガ一発で見つけるし。小っちゃい頃はかくれんぼで負けっぱなしだったニヤ……」

千雨はぶつぶつ呟く相棒を気にせず、ぐるりと踵を返してベースキャンプに戻る。

「あれ、何をするニヤ？」

「予備の食糧も無くなるしな、こゝはひとまず、」

千雨はささつと荷物をまとめて背負う。

「 帰る。お前も荷物まとめよ」

「 でもあっちにいるヤバそなのはじつするー！ヤ？」

「一応誘つてみたけど反応しないし、遠すぎても何もできねーよ。まあ、ギルドに報告するけどな」

とはいっても千雨の勘が正しければ、相手はアマツマガツチ以上。そしてこの近辺で古龍討伐経験のあるハンターは千雨達だけ。何か起きるとするなら必ず千雨達が動くことになる。

古龍撃退経験のあるモガの村の英雄や、峯山龍狩りで知り合った凄腕のハンター達に連絡を入れるべきか。あるいは別の大陸とやらから人材を集めて貰う必要があるかもしれない。

「あれ、アルバトリオンとやらなのかなあ」

いるかどうか分からぬ古龍の名前を出してみたが、どうにもしつくりこない。未知の古龍だらうか。あるいは……。

「 神様、かも」

直後、世界がいきなり変わった。

空は昏くなり、風は生ぬるく頬を撫でた。アマツマガツチすら遠く及ばない、絶対的な何かが完全にこちらを捉えている。

「……それでも目視出来ねー」

「 千雨、完璧ヤバいーヤ」

「 わーつてる」

愛用の王牙刀【伏雷】を抜き放ち、構える。相手は斬れるかどうかも分からぬが、気持ちで負けるつもりはない。斬ると自分の中で決める。

「 ツ！ 来る！」

勘が危険を訴える。相棒を掴み、大きく跳躍し、思い出したように太刀を振るう。切つ先が何かに掠つた気がした。

「 ！」

激震。空中にできるはずがない亀裂が生まれた。中は闇より黒く、亀裂は千雨達の落下先にも伸びて来る。

落ちる。そう理解した千雨は、相棒だけでも逃がそつと、彼を掴

んだ腕を振りかぶり、見た。

彼は逆に千雨を投げようと、その小さな体を必死に動かしていた。

「――！」

千雨は相棒の名を叫び、投げる。

しかし、我を忘れた時間が長く、二人は空中の裂け目に落ちた後。投げられた彼の体はわずかに裂け目から出て、また入る。

千雨は最後まで彼女の腕を掴む小さな手を離さそうとしなかった相棒を見て、泣いた。

幼いころから一緒に相棒を助けられなかつた。悔しさで頭がどうにかなりそうだつた。彼の小さな体に手を伸ばし、思う。

（死にたくねえっ！）

長谷川千雨は、駅のホームで電車を待つていた。今日から新学期。中学三年生となる。

あと一年もあの子供先生が担任だと思つと、憂鬱になる。深くため息をついて、周りの生徒たちから怪訝な目を向けられる。電車が駅に進入することを告げるアナウンスが流れる。

「ん？」

誰かに呼ばれた、様な気がした。後ろを振り向いたが、誰も呼んでいなかつた。ストレスで頭がいかれたのだろうかと、また憂鬱になつた。

電車がやつてきたのが見えたので、前を向いたら、急に姿勢が崩れた。

「あ？」

体が落ちる。電車の運転手が慌てているのが見えた。落下地点はおそらくレールの上。減速しているとはいって、車輪に巻き込まれたら死ぬだろう。

走馬灯のように思い出が脳裏を駆け巡る。悲鳴が聞こえた。五月

蟻い、死にそうなのはこつちだ。

(死にたくねえつ！)

視界が急にクリアになる。手に持っているのは記憶に無い愛刀と見覚えの無い相棒。太刀は捨てても問題ないが、猫の様なおかしな生物は手放せない。

彼を抱え込むよつに腕を動かした。体勢が変わったおかげで脚が巨大な塊の方向を向く。好都合だ。そのまま電車を蹴って、跳躍。とつさの回避行動は成功し、よつやく止まつた電車から離れたレールの上に着地する。

周囲がどよめく。

「君！ 大丈夫かい！？」

駅員の叫び声が聞こえる。返事をしようとして、自分が何と何を両手に持つているか思い出す。どちらも調べられたら拙い。

「ごめんなさいっ！」

脱兎のごとく走り出す。幸い、追いつかれることなく逃げ切れた。

「はー、はー、はー。くそ、この距離は、強走薬、無いと、キツイな。はー」

ようやく人がいないところに来れたので、手に持っていた相棒を下ろして座り込む。

相棒のお腹が、膨らんで、元に戻つたのを確認できた。

「……よかつた。生きてた」

涙がこみ上げてくる。あのわけのわからない現象から帰還できた

ことを、泣いて喜んだ。

ひとしきり泣いた後、ふと気が付く。

一つの人生を歩んだ記憶がある。

一つは、この平和な日本で生まれ育った女子中学生の千雨の記憶。
一つは、コクモ村に住んでいる超一流のハンターである千雨の記憶。

服装は、女子中学生の物。体は、ハンターの物。精神は、よく分
からない。

「なんだよこれ、異世界トリップに分類していいのか？」

千雨の疑問に答える者はいなかった。

第2クエスト

千雨は幼いころに両親を亡くしている。あまりに幼すぎて両親の顔どころか、住む村がティガレックスに襲われて壊滅し、一人だけ生き残った事さえ覚えていない。

気が付いた時には育ての親のハンターと、彼が雇つたオトモアイルーのマッコリと三人で各地を旅して生活していた。

育ての親のハンターは酷く酔っ払うと、千雨の村の人々を助けられなかつたことを延々謝り続けるので、あまり酒を飲ませないようにするのは苦労した。

マッコリはよく千雨の遊び相手になつてくれた。おかしな名前は雇い主が付けたものだが、マッコリ自身はその名前を気に入つていた。

転機が訪れたのは千雨が八歳になるころだったか。育ての親がティガレックスに殺された。

当時滞在していた村の者は、千雨を引き取つて育てようとしてくれたが、断つてハンターとして生きることを決めた。

復讐、という気持ちがなかつたかと思えば嘘になる。だが、ギルドから派遣されたハンターがティガレックスを退治するほうがどう考へても早いので、どうでもいいと言えばどうでもよかつた。

ハンターになつたのは強くなりたかったから。一度も自分の人生をめちゃくちゃにしたティガレックスに負けっぱなしになるのは我慢できなかつた。

村の者は無謀だと千雨を止めたが、マッコリは千雨の決断に賛成してくれた。

ギルドの者も無謀だといったが、千雨はハンターとして登録してもらつよつて申請を出した。

当然受理されなかつたが、マッコリと共に鍛錬をして僅か一ヶ月、二人で一頭のドスジャギイを仕留めてギルドの者を黙らせた。最年

少ハンターが誕生した。

千雨達はそのまま村に滞在。マツコリはそのまま千雨のオトモになることを決め、一人で鍛錬と狩りを繰り返した。

一年後、ギルドから派遣されたハンターたちを退け続け、主とまで呼ばれるようになつた育ての親の仇であるティガレックスを仕留めることに成功した。

その後、ギルドにユクモ村の常駐ハンターになることを打診され、承諾。さらに一年後、ユクモ地方に再来した古龍アマツマガツチを討ち取り、彼女達は英雄となつた。

「……ニヤニヤッ！ 千雨！ 無事かニヤ！？ 何処にいるニヤ！？」

がばっと相棒のマツコリが起き上がり、辺りをパパパッと見回す。

「こっちだ、こっち」

千雨の言葉に振り向いたマツコリは、いきなり号泣。千雨の顔に飛びついた。

「よかつたニヤ！ 無事かニヤ？ 心配させないでほしいニヤ！」

「ヒツチのセリフだ。……且、覚まさないから心配したんだぜ」

そう言ってマツコリを顔から引きはがす。

「うなー、『めん』ニヤ。……あれ？ 千雨、その格好どうじたニヤ？」

さて困った。千雨も現状はよく把握できていない。どう説明したらいいものかと考え、気が付く。

「ちょっと黙つてくれ。誰か来る」

サツと植え込みに隠れて、気配を殺す。足音から無警戒な手練れと仮の判断。

息を殺し、じっと身を潜める。やつてきたのは元担任の高畠・T・タカミチ。

（は？ なんで高畠があんな手練れみたいな足音出すんだ？ いや、デスマガネとか言われてるからそうおかしくはないのか？）

それにしても練度が違う。彼の足音は戦士のそれにしかきこえない。只の教師があんな歩き方をするものか。

「おかしいな、目撃情報からすると、このあたりなんだが……」「目撃情報とは、なんだろうか。そう考えて、駅で鮮やかに電車を回避したことを思い出した。探しているのは恐らく千鶴だ。そう考えたところで、高畠がこちらを見る。

（気づかれた！）

視線は合っていないが、間違いないだろ？ 雰囲気が変化した。とつぞり両手のマッコリと王牙刀【伏雷】を放して立ち上がる。

「は、長谷川君？ なんでこんな」

急に現れたことに驚いたのか、間抜けな声を出す高畠。

「いやあ、実はこの辺で落とし物をして探してたんです。もう見つけたんで手伝ってくれる必要はないですよ！ ジャあそういうことまで」

一気にまくし立てて、マッコリと太刀を掴んで、逃げる。

後には、ぽかんとした高畠が残された。

結局走って学校近くまで来てしまった。普通は電車を使う必要があることを考へると驚異的だ。

「あつぶねー。ばれるところだった」

そう言ってから、ふと思う。王牙刀【伏雷】は完璧に危険物なので所持がばれるとまずいが、この麻帆良でアイルーという訳わからん生物が見つかった所で、何か追及されるだろ？

世界樹なんて物が許容されているので、うわー、すごいで終わり

そうな気がする。それはそれでなんか頭が痛くなりそうだった。

「千雨。いい加減放してほしいニヤ」

「あ、わりい」

地面に降りたマツコリは体をブルブルと振わせて、千雨を見る。「いい加減どういう状態なのか教えてほしいニヤ。見たこともないものばかりで頭が破裂しそうニヤ」

「私も何がどうこう状態なのか分からねーんだよ。ちょっと考える時間くれ。……そうだな、これ隠して夕方までこの辺で待つてくれ。用事も入ってるんだ」

放課後まで考えていれば何とか状況の把握はできるだろう。太刀をマツコリに渡して。注意事項を説明する。人の言葉で喋らないこと。人間に一足歩行しているところを見られないように注意すること。

「ウニニヤ。しょうがないニヤ。その代わりちゃんと説明してもひづニヤ」

マツコリは玉牙刀【伏雷】を持つて隠せそつな場所を探す。

千雨はため息をついて校舎に向かった。

なぜ気が付かなかつたのだろう。いや、気が付くはずがない。何せ今までこいつらを見ていたのはただの女子中学生だったのだから。三年A組の教室に入つて感じたのは、以前よりずっと強い違和感であった。

長瀬と桜咲と龍宮と古菲はなんか強い。強いのは分かつていたが、千雨の歩き方に違和感を感じているようだ。中でも桜咲と龍宮はなんか変な感じがする。

ザジとエヴァンジエリンは、よく分からぬ。龍宮の変な感じをより強くしたような違和感を感じる。

絡繹は、前からわかつてたがロボットだ。生物の気配を感じな

い。朝倉の左側の空いている席から感じる何かの方が生物っぽい。

あと、ネギ先生と近衛の気配はなんか濃い。

「長谷川さん、ちょっと遅かったけど何かあつたんですか？」

「ちょっと事故っぽい何かに巻き込まれていた様な感じです。怪我はないので心配はいりませんのであしからず」

まくし立てて、子供教師からの追及を逃れようとする。

「事、事故ですか！ そう言えば今日電車事故みたいなこと」

「それとは別です。何にも関係ありません」

実際は自己にあつた当人なのが、追及されると困る。何とか追い払って、席に着いた。

「大丈夫なのですか？」

「綾瀬、むしろいつもよりも無茶苦茶健康だから気にするな」

「はあ……」

そしてチャイムが鳴る。始まつた馬鹿騒ぎで千雨はため息をついた。

何とか学校にいる間に纏めた話をマツコリに聞かせる。

ここは、人間の文明が発展し、モンスターや獣人のような存在がない世界であること。

目の前にいるのが、こちら側にいた長谷川千雨という少女と、マツコリの知るハンターの千雨が融合したような存在であること。どうしてこちらに来たのかはよく分かつていないこと。帰る手段は不明なこと。そもそも千雨同士の融合が解けるのかわからないこと。

一通り話を聞いたマツコリは、深くうなづいて言った。

「まあ、何も知らないで放り出されたよいまし状態であることは理解したニヤ」

「取り乱さないんだな」

千雨の言葉に不思議そうに首をかしげるマジコ。

「取り乱したところでどうにもならない」や。田那さんが死んだと
きだつて千雨もそう言ったニヤ

「あー、そうだな。……帰りたくはないのか?」

「仮に向こうに戻つても千雨がいないんじゃしょうがない」ニヤ。ま

あ、コクモ村がちょっと心配なだけニヤ

顔を合わせる一人。ニヤリと笑いあつて、立ち上がつた。

「うし、じゃあこっちの私の住処に帰るとするか」

そう言つた直後、千雨は一瞬で現れた気配に向かつて振り向く。

「その前に、僕にもいろいろと話を聞かせてもらえないかな?」

そこには、高畠・T・タカミチが、手をポケットに入れたまま立
つていた。

第3クエスト

どうしたものか、千雨は考える。

ハンターの自分の知覚を超えて出現した高畠に驚いて、思いつきリミドルキックを叩き込んでしまった。

鮮やかな放物線を描いて飛んで行つた高畠は頭から地面に激突。気絶していた。

ジャギイくらいなら一発で仕留められる千雨の渾身の蹴りを食らつても骨折せずにいるから、理不尽なまでに頑丈だ。

放つておいても起き上がりそうな人種のようだがそのままというわけにもいくまい。第一、目覚めたらまた千雨の話を聞きに来るだろ。死人に口無し作戦は道徳上の理由で却下。

「……人間相手にやりすぎニヤ」

マツコリの言葉が耳に痛かつた。

「とりあえず、保健室に運ぼう」

氣絶した成人男性を女子中学生が脇に抱えて運ぶ光景は、なかなかにシユールだった。

「すみませんでした」

「……いや、いいよ。最初逃げられたからって驚かせよつとした僕も悪かつた」

「そうですか。ではおあいこという事で」

間違つても危害を加えた人間が言うセリフではない。首を固定され、まだ痛む腹を擦る高畠は顔をひきつらせた。

「ところで、彼は何処だい？」

恐らく会話は聞いていたのだろう。隠す気もなくマツコリの居場所を尋ねる高畠。

「彼、とは？」

盗み聞きしていた相手なので容赦なくすつとぼさせてみる千雨。

「ほり、マツコリという猫妖精みたいな……アイルーといったかな？」

ケット・シー、とこう言葉を自然に使つ高畠。違和感を覚えた千雨は率直に聞く。

「高畠先生は、魔法使いか何かですか？」

「……ああ、うん。そんなようなものだよ」

千雨は愕然とした。まさかそんな非常識な存在があるとは。異世界とか人体融合とか魔法とか、もうめちゃくちゃだ。

「ああ、もう常識ってなんなんだろ？？」

くずおれる千雨を見てマツコリが窓から飛び込んできた。

「ちょっと、何したニヤー！ 千雨がここまで落ち込むなんてそういうないニヤー！」

怒るマツコリを見て、高畠は遠くに田舎をつけて、ぼそつと言つた。

「ただの蹴りで僕を氣絶させた長谷川君に、常識とか言われたくな

いなあ……」

じつやら魔法使いから見ても千雨は規格外らしい。憂鬱だ。

寮に帰る道すがら、千雨は高畠から話を聞いていた。

魔法の存在は秘匿されるもので、違反するとオジョヨにされたり、記憶を消されるらしい。

わざわざ言いふらす気はないので、千雨には関係ないだろうと思つていたら、高畠は言った。

「僕としては魔法生徒になることを勧めたいんだけどね」

「いやいや、私魔法とか使えないですよ」

話をよく聞くと、魔法のように秘匿された技術に気の使用、というものがあるらしい。

千雨達の近くに一瞬で現れたり、蹴りを食らっても死ななかつたりしたのはそう言つ方面的の技術なのだそうだ。

油断していたとはいへ、身体強化していた高畠を昏倒させるダメージを与えた千雨を野放しにはできない様だ。

気。そう言われて千雨の脳裏に一つ思い浮かぶものがあった。

「アニメとかでよく見る、こう構えて、覇ツ！」

轟ツ！

強く輝く光の塊が放たれる。尾を引いて飛んで行った氣弾を見て呆然とした千雨の肩に手を当てて高畠は言つた。

「……さあ、長谷川君。君は魔法生徒にならないと」

ああ、人生つてままならない。氣を放った両手を見つめ、千雨は涙した。

「ふふふ、だがまあ、坊やがまだパートナーを見つをぶるつー！」

「マスター！ 一体どこから攻撃が！？」

千雨の放つた氣弾はエヴァンジエリンに当たつた。

ドナドナを脳内で流しながら、千雨は高畠についていく。

「そう悲觀するものじゃないよ。魔法生徒だからって、普段は特に何かしようと強制されるわけではないからね。まあ、危ないことじ

なければ籍を置くだけでもいい」

「うん、しようがない。向こうでも無登録ハンターとかは取り締まられていたりしたのだから。組織とつながりを持つのは悪いことじゃない。ギルドと同じ様なものだ。

そう考えた千雨の脳裏にある可能性が浮かび上がる。

「あの、もしかして武器の所有とか認められますか?」

「うん? そうだね、管理をきちんとしていれば認められるよ」
購入するルートも教えてくれたりするとか。おお、いいじゃないか。魔法生徒登録。もしかしたら罫とか薬系統とか爆薬とか防具とかも手に入るかもしない。そこまで考えてふと気が付く。「こっち、狩猟できるような飛竜とかいないじゃないか。どうやって稼げばいいんだ?」

膨らんだ期待は瞬く間にしほんだ。

「せ、生活費はどうにかなるか?」

相棒をなでつつ、千雨は泣きながら何とか立ち上がった。

「マッコリ、お前は私が守るよ」

「千雨!」

抱きしめあう二人。

高畠はいたつて普通だった千雨の変わりよつこ、彼女が元の生活に戻れるのか不安になつた。

第4クエスト

「おーい、長谷川千雨」

始業前。いきなりエヴァンジエリンに話しかけられた。

「なんだ」

「ちょっと来い」

昨晚、魔法関係者の基礎知識的なものを教えられて少々疲れていた千雨。まあ三、四日寝ないで活動することもできるが、休めるもんなら休むのが基本だ。雰囲気でここに話をしてもないと訴える。立ち上がらない千雨に、舌打ちしたエヴァンジエリンが唇だけを動かす。

（魔法関係だ）

さつそくなんか面倒なことになりそうだ。魔法生徒として登録したのは間違いだつたか。そんなことを考えて千雨は席を立つ。エヴァンジエリンについてこられたのは屋上。隠らしきものは感じ取れない。絡繆もついてきたが、そんなことはどうでもいい。「あれが、新入りのくせに挨拶に来ないのは生意気だつて話?」「違う! 昨晩の件だ。貴様いつたいどういつつもりだ」

昨晩、といわれて困惑する千雨。ちょっとした座学に氣の使い方の軽い特訓をしただけだ。間違つてもこのちみつこい同級生に因縁つけられる記憶はない。

「貴様、私を狙つて気弾を放つてきただろう。私が『闇の福音』だという事を知らんのか」「一つ名を自称するのは、……もうちょっと貫禄出でからにした方が良いと思つ

流石にイタいとは言えなかつた。

「貴様ツ! いいか、この異名は私を狙つてきた馬鹿共を蹴散らした結果、恐怖した人間どもが付けたものだ!」「怒り出した。正直そんなことはどうでもいい。

「……とりあえず、すまん。そんなことは知らんし、氣弾だつてたぶん只の流れ弾だ。怪我とか、ないか？」

「真祖の吸血鬼をなめているのか！」

「そう言わても知らないものは知らないし、心配したのに怒られた。理不尽なものを感じる。

「魔法関係は昨日知つたことなんだよ。正直お前が有名人だつたとしても誰それ状態なんだ」

ぽかんとするエヴァンジェリン。

「あれほどの威力の氣弾を撃つておきながら、昨日裏の世界を知つたばかり？ 嘘もたいがいにしろ」「

「いろいろ事情があるんだよ」

何度も説明したくはない。自分だつてよく分かつていないのでからう。

「ところで、吸血鬼だつて？ 日光とか大丈夫なのか？」

「お前、本当に知らんのか？」

最初から知らないと言つているだらうに、なんて疑り深いのだろう。

「私は太陽を克服した吸血鬼だ。……怖くはないのか」

「いや。お話通りに不死身なら殺り合つ時面倒だなー、くらいかなあ。生きた人間をバリボリ食つわけでもねーし

「人間をバリボリ……」

「魔法の世界があるんだつてな。そっちじや魔獣とかドラゴンが食つたりするだろ？」

エヴァンジェリンが頭を抱えてぶつぶつ独り言を言いだした。その様子を見て、こいつの童種は人を襲つたりしないのだらうかと考える千雨。

「あ、そろそろ始業だ。エヴァンジェリン、絡繆、教室に戻るぞ」

「あ、ハイ。しかしマスターが……」

「あー、そういうえばコイツよくサボるよな。サボりたいなら好きにしてくれ」

おのおりとする絡繆と、ぶつぶつぶやくエヴァンジエリンを置いて、千鶴は階段を下りて行った。

「やつこや座我の具合とか結局聞いてなかつたな。後でなんかジュースでも奢るかな」

「は、長谷川さん。エヴァンジエリンさんに呼び出されたって本ですか？」

「はい。ちょっと怪我させちゃつたみたいで……」

「え、エヴァンジエリンさんが怪我！？」

そう言えばこの先生の持つ木の棒、どう見ても杖である。これに乗つて空飛んだりするんだろうか。

「うなー、なあ、ふーしゃーーお

幸いにしてこちらでも言葉は通じた。あまり頭がいいとは言えない者達だから返事が片言で返つてくるのはちういのだが、仕方あるまい。

マツコリは女子寮近くの猫たちを纏め上げていた。その影響力は絶大。瞬く間に三つのヒリアを統括するボス猫として君臨。この分だとまだまだ配下の猫は増えそうだ。

「ほんとはアイルーなんだけどニヤア」

側近の猫が慌てた様子で駆け寄つてくる。元ボスの一匹だ。

「にゃあ、なー、しゃー。うなう

「なう。……ヤバそうなネズミでどんなやつニヤ？　まあ、見ればわかるかニヤ」

よつと立ち上がるマツコリ。なー、なーと新たなボスを称える猫たち。元ボスの猫が一声鳴いて、マツコリを導く。

「ドスジヤギも頑張つて群れを纏めてたのかニヤア？」

まあ、考へても仕方のないことだ。マツコリはネズミをどう料理

するか、頭の中で作戦を立て始める。

学園長室のドアがノックされる。

「何じや？」

「失礼する」ヤ

入ってきたのはマジコリ。手には紐でぐるぐる巻きにして何かを持っていた。

「おや、マジコリ君だつたかの。なんじやねそれは」

「いやいや、それを訊くのはこっちだ」ヤ

ぽい、と学園長の前に何かを下ろす。

「これは、オコジヨ妖精？」

「そーいう生き物なのか」ヤ。言葉をしゃべる動物は魔法関係らしくて聞いたから持つてきたヤ。ここで飼つてる生物か」ヤ？」
はてと首をかしげる学園長。

「オコジヨ妖精を連れている先生も生徒もいなかつたはずじやが」「ニヤア。じゃあ、侵入者」ヤ。尋問とかはそっけに任せる」ヤ。
一応薬で眠らせたから、目が覚めるまで後五分くらいかかる」ヤ」
そう言つて後始末を丸投げしたマジコリ。ひとつに四足歩行で外
に出て行った。

「……まあ、まずは事情を訊いてみるかの？」

オコジヨ妖精、アルベル・カモミールは猫に対して深いトラウ
マを抱えることになつた。

逃げ道を一つ一つ塞がれていく恐怖は相当なものだったようだ。

第5クエスト

「ほ、僕のパートナーになつてくれませんか！」

「断る」

がーん。千雨にはそんな音が聞こえたような気がした。

「ま、待つてください！　せめて事情だけでも聞いてくれませんか！」？

夜にいきなり千雨の部屋までやつてきてパートナーになつてくれといつガキンチヨ。閉めよつとしたドアに手をかけてなおも轟^{クラク}出す。

「あー、わかりました。聞くだけは聞いてみるので、とりあえず騒がないでください」

「あ、ありがとうございます！」

仕方なく部屋に入れるが、恋人探しにじうじうここまで切羽詰まつているのだろうか。後からひさつきの声を聞いた乱入者が来ないよう鍵をかけて、奥に進む。

「なー」

マツコリは猫のふりモードに移行した。

「て、てめえはあの時の猫妖精！　なんでここにー。」

「カモ君！」

どこからか聞こえてくる声。どうやらまたも魔法関係の厄介^{厄介}じごとのようだ。

「アイルーだニヤ。そいつお前は侵入者のネズミじゅ二ヤいが一ヤ」

「ひッ、く、来るな！　噛むぞコラフー。あ、兄貴助けてくれー。」

「ネズミにかまれたといひで痛くも痒くもないニヤ。なんで解放されてるニヤ？」

動物たちの会話にネギは困惑。

「ち、千雨さんも魔法関係者なんですか？」

「誠に遺憾ながら

ギヤーギヤー騒ぐ動物と沈黙する子供先生。千雨的には早く追い出したいくなつた。

「エヴァンジエリンを何とかしてほしー?」

「は、はい。申し訳ないんですけど」

「断る」

「千雨さんっ! ?」

ちなみに千雨はいつの間にか呼び方が下の名前になつてゐる事に、今気が付いた。

「怖い先輩をこれ以上怒らせたくないし」

「ちょっと千雨の姉さん、あんまりだぜ」

「うつむきこーちゃん」

「ヒイツ!」

五月蝶いオーバージョはマツコリガ抑えた。睡眠薬を嗅がせて、静かになつたので話を続ける。

「なんでまた、私にそんなことを頼むんですか」

「千雨さんはエヴァンジエリンさんを、真祖の吸血鬼を怪我させることが出来たんですね?」

「あー、氣弾が当たつたらしいから怪我はしたでしょ?」

「え?」

話を詳しく聞くと真祖の吸血鬼は最強クラスの化け物らしい。普通の魔法使いじゃ手も足も出ないとか。古龍みたいなもんかと千雨は認識。

しかしエヴァンジエリンは魔法生徒なのだから、関東魔法協会に籍を置いているはずだ。

「高畠先生とか、学園長、他の魔法先生でもいいかもしれませんね。相談してみたらどうですか?」

「え、タカミチや学園長はいいとして、他の魔法先生?」

「は?」

「この麻帆良は関東魔法協会の本拠地で魔法使いがたくさんいて、魔法先生とか魔法生徒として活動していることを説明。

「私はこの前魔法生徒として登録されたばかりだから知らないなかつたけど、なんで先生が知らないんですか」

「うう、修業中だからかなー?」

「まあ、学園長先生には報告しちゃうですが、ちゃんと説明受けた方が良いと思いますよ。私が言うのもあれですけど」

「はい、と頃垂れてしまつたネギを見送つて玄関のドアを閉める。「魔法使いに存在知られてないつて、ゆるゆるじやねーか関東魔法協会。……そう言えば、麻帆良は非常識な場所だと思つてたけど、あれも魔法関係だつたりするのかな」

だとしたら無茶苦茶だ。一般人の目から見ておかしいのに放置とは。ちょっと組織の在り方について苦言を呈する必要があるのかもしない。

学園長はエヴァンジエリンを注意しておくから、千雨にはヤバそくな状態になつたらネギをそれとなく助けてほしいと依頼してきた。

「報酬とか出ますか?」

「わしら魔法使いは『立派な魔法使い』として」

「前も言つたけどなる気はないです。装備とか道具もお金かかりますし、報酬出るんですか?」

交渉の末、何とか悪くない条件は引き出せた。

「それにしても最強クラスの化け物が、封印されて弱体化ねえ。どうやつたんだ?」

魔法とは不思議である。

そう言えばヤバい状態とはどの程度の事だろうかと考える。しば

らく考えた結果、救助隊のアイルー達が助けに来るくらいだと勝手に判断して、今日は眠ることにした。

「これも修業じゃ」

「ええ！？」

魔法先生は無理難題を吹っ掛けられた模様です。

第6クエスト

魔法生徒になつた時に学園長に頼んだ装備が届いたので受け取りに行く千雨とマツコリ。

「よくきたのう。ちよつて今問題が発生したので連絡しよつと思つていたのじやが」

学園長の話によると、侵入者が来て、山の中に隠れてしまったので捕獲を手伝つてほしいとのこと。

「どんな奴ニヤ？」

「関西呪術協会のはぐれ者のようにじやな」

装備の状態を確かめるのもいいだろつ。報酬も出すよつなので参加することにした千雨達。

「で、なんで私の防具は制服なんですか？」

「いいじやろ？ 普段から身に着けられるからね」

魔法の品で結構いい防具なのだとか。しかし、氣で身体強化した方が防御力が上がるらしい。無駄遣いだったかもしぬないと千雨は悔やんだ。

マツコリは炎の魔法剣を素振りして、具合を確かめた。一回首をかしげたのを見て、まだ慣れるには時間がかかるとみる。

「この位置にすでにほかの魔法生徒たちが向かつておる。彼女たちと合流してくれ」

さて、誰がいるのう。

太刀とかもつてウロウロしてゐるを見かけられたら拙いので、屋根の上を瞬動で移動していく。

「便利なもんだよなあ。これなら強走薬なんかいらねーし、回避もずっと楽だ」

「アマシマガシチとやつあつ時に知つてたなら、もつと樂に戦えた
ニヤ」

遠い田をして、あの時しんどかつたニヤ。とつぶやくマシコリ。
あれは、まあ結構な量の素材を研究機関に安く買つていかれたので、今後遭遇しても戦うかは微妙だ。自分の取り分が多ければ考えるが。

合流予定地に降りる。しばらくしてやつてきたのは龍富と桜咲だつた。

「お前らも魔法生徒なのか」

「ええ。……長谷川さんが魔法生徒になつたとは話に聞いてこましだが、これいのよつな場所で会つとおかしな気がします」

「んー、まあな」

「とはいへ、魔法生徒としてここにいるのは事実だ。よろしく。……足を引っ張らないよつてしてくれよ?」

「善処する」

そこで、桜咲がふと、何かを不思議に思つたようだ。

「長谷川さんたちはずつやつてここに? 学園長から合流すると聞いた時には、私たちはすでに移動していたのですが」

「瞬動で屋根の上を跳んできた」「ニヤ」

マジコツと同時に答えると、何故だか一人が妙なものを見るよつな目をした。瞬動は移動技術じゃないのか?

「武器とかもつてうらうらしてたら、完璧不審者扱い受けるだ。見つからないように移動するだろ」

何故だか桜咲がショックを受けていた。

「どうした」

「……その辺には触れないでやつてくれ」

こつもの竹刀袋をみて、納得した千雨であった。

「一時、一百」

「……ビンゴだ」

千雨は学園側の人間を把握していないので、人影を見つけるたびに龍宮に確認してもらつ。

今回見つけた右側にいた人間は侵入者だったようだ。龍宮が銃を撃つ。

ギイン、と大きな音が立つ。どうやら魔法で防がれた模様。

「飛んだぞ！」

「チツ」

龍宮が舌打ちする。生半可な攻撃では防がれるみたいだ。

空中に逃げた侵入者に向かって、桜咲が気の斬撃を飛ばす。それを見て千雨は一つ思い浮かんだことを試してみることにした。王牙刀【伏雷】を構え、気を込める。刀身が輝き、バチバチと電気を発していく。

「即興技、飛竜斬り！」

振り抜かれた王牙刀から、轟音を立てて雷が天に昇る。雷は侵入者に直撃し、そのまま空の彼方へ消えた。

「斬撃のつもりだったけど雷撃になつたのは何でだ？」

しかも威力が馬鹿みたいに高い。秘匿される技術である為、もう少し加減を覚える必要があるのは今後の課題か。

第7クエスト

「マジコっせん。ありがとうございます」

手早く怪我をした猫の手当をする茶々丸。消毒液がしみたのか、猫がびくっと動ぐ。

「にゅーにゅー、じつちが感謝する方ニヤ。正直、僕の手に余る状態だつたニヤ」

茶々丸とマジコリが出会ったのは昨日の事。

始まりは、群の猫が怪我をしてしまったのでマジコリを頼つてきた事。

ひい覚えの知識で四苦八苦して応急処置をしようとして上手いくかず、いよいよとつておきを使おうかという時に現れたのが茶々丸。彼女は上手く怪我の処置をして、他に怪我をした猫がいないか尋ねてきた。そうして今日、マジコリは何匹か手当が必要な猫を集め連れてきたのだ。

「手持ちの薬を使わなくても済んで助かつたニヤ。アオキノコと薬草はまだあんまり見つかってないから困つてるニヤ」

なんで蜂蜜の方がお店で簡単に手に入るのか、不思議で仕方ないマジコリ。

「アオキノコと薬草。それはこいつたい何ですか？」

「知らないかニヤ？　回復薬の材料ニヤ。回復薬は仕事で使うかもしれないからホイホイ使えないニヤ」

「知りませんでした……」

「向こうじゅいっぱい採れたんだけどニヤア……」

生まれた世界を思い出すマジコリ。どちらの世界も一長一短かもしれない。

「こいつらも鍛えてやるかニヤア。そつすればつい眠るだけでどんな怪我でも回復するニヤ」

「そういうものでしようか？」

「訓練されたハンターは瀕死状態でも眠ればすつきり回復ニヤ」「話している間にすべての猫の治療が終わつた。茶々丸がほっとしている、そうマツコリは感じた。

「さて、待つてくれたのはありがたいけど、盗み見ているのは感心しないニヤ」

「そう言つと、そろそろと建物の陰からネギとカモ、明日菜が現れた。

「千両みたいにそんなに勘はよくないけど、それでも長じてじつと見られてたらわかるニヤ」

「……油断しました。マツコリさん、下がつてください」

「ずい、とマツコリの前に立つ茶々丸。

「やい、猫妖精！ てめえなんでエヴァンジョンジョンのパートナーと一緒に居やがる！」

「まあ、世話になつたからかニヤ？」

「いきり立つカモ。しかしまツコリはカモの怯えが見えてとれたのかどこ吹く風だ。

「ええい。兄貴、一緒にやつちまいましょー！」

「で、でもー」

「その様子を見てマツコリは、ふうと息をはいた。

「自分でやるわけでもないのに偉そつニヤ。……ネギだつたかニヤ？」

「え、はい」

「修業中、だつたかニヤ？ 揉んでやるからかかつて来るニヤ」「シャドーをして挑発するマツコリ。するりと茶々丸の前に出る。

「マツコリさん、いけません！」

「兄貴ー。」

「つづ、……行きます！ 契約執行十秒間！ ネギの従者」

ネギの呪文はそれ以上紡がれなかつた。マツコリは素早く駆け寄り、ネギの肩にいたカモを捕えた。

「カモ君！」

「動くニヤ！」

力モの首に、どこから取り出したのか分からぬ、小さな刃物を押し当てたマツコリが大声で制止する。

「こいつがどうなつてもいいかニヤ？」

「う……力モ君」

力モはぶくぶくと泡を吹いて氣絶していた。

「……とまあ、このように人質を取られることもあるニヤ」「ぽい、と力モを放り出して刃物をします。

「……え？」

「自分と同じように、相手が卑怯な手段を使うことも考えた方が良いニヤ。……あー、覚悟もニヤいのに戦場に出て来るべきではニヤいとも言つとくニヤ」

ぽかんとする一同。マツコリは四足歩行でタタツ、と駆けて行く。「授業料はタダにしとくニヤー！！」

静止した状況からいち早く離脱したのは茶々丸。ついで明日菜が元に戻る。

「ええと、逃げられちゃった。……あ、ネギ、アンタおでこに肉球の跡が！」

「ええ！ もしかしてあの一瞬で付けられたの！？」

何故か人質役になつた力モはしばらく忘れられていた。

「ふーん。そんなことがねえ」

「まあ、各個撃破。ちょっと頭使つたのは評価できるかニヤア」
はて、と千鶴は考へる。

「オゴジヨの入れ知恵じやないのか」

「あー、そうかニヤ。まあヒトは補い合つて生きるものニヤ」「せうだな」

第8クエスト

長谷川千爾とマジコツは採取ツアーにやつてきました。

「アオキノ「発見と。なんだ、山の方に来れば結構あるなあ
これなら自分たちで使う分量を十分確保できるだろ。」

「いっぽい採るーヤー」

回復薬、解毒薬は既に十分な量が確保できた。

元の世界と違があると困るので、ために猪をぼくました
後飲ませたら普通に効いた。効かず死んだとしたら、まあ食べる
ことになつただろう。

「それにしても医者が見たらすつ飛びような効果だな。これ」

何せ瀕死でも何度も飲ませればあつという間に回復する。何故使
われていいのか不思議だ。魔法関係のものなので一般使用されて
いないのだろうか。

そんなことをつらつらと考えながら採取を続けていたら、あつと
いう間に用意した袋はいっぽいになつてしまつた。

「これ以上は持つて帰れないから帰還するかなあ」

帰り支度を始めたところで、一つの気配に気が付く。覚えのある
気配だ。そちらを振り向くと、ちゅうどひらを見ていた長瀬と田
があつた。

「長谷川ー！ ほんなどこりで何してゐでござるかー！？」

ひょいひょいと慣れた様子で近づいてくる長瀬。後ろにはなぜか
ネギもいた。

「お前こそ何やつてんだ。修業でもしてゐのか？」

何故か長瀬が答えない。視線の先を見るとマジコリがいた。立つ
ていたのを見てしまつたか。

「まあ、いいか。どうせハイツ忍者だし」

「い、いや違うでござるよ」

説得力が全くない。

「長瀬川は面妖なネコを連れてここに何を。お主はイングランド派ではござりんかつたか」

「こりいろあつてな。狩りに田覓めた」

ほほう、と頷く長瀬。

「最近、急に達人の身のこなしになつたから驚いていたでござるが……」

やはり歩き方などは変わつていたようだ。戻せと言われても戻す氣はないが。

「お主も一緒に修業するでござるか？」

面倒だが、このままだと体がなまつてしまつだらう。千鶴は長瀬と行動を共にすることを決めた。

「じゃあそするか。といひで袋とか持つてないか？ 貸してくれるとありがたい」

「一応持つてるでござるが」

もう少し素材集めはできそうだ。

32

「本気か」

長瀬に模擬戦をしてほしこと言われたため、真面目に聞いてかける。

「本気でござる」

田を見ると、真剣にこちらを見つめていた。この分だと古菲と戦うのもそう遠くはなさそうだ。

「対人戦闘なんてやつたことないぞ。加減できるかわからん」

「拙者が手加減される方でござるか。かまわんでござるよ」

こゝはひとつ胸を貸してほしこでござる。とこう言葉を聞いて、不安になる千鶴。

長瀬の練度は多分高畠より下。一つ加減を間違えばクラスメイトを殺すことになる。

「まあ、回復薬もあるし。何とかなるか」

一撃で胴体真っ二つにならなければの話ではあるが。

千雨が超一流のハンターであった理由の一つに、まずは抜けた回避力がある。一撃で致命傷となる竜種の攻撃はガードするより回避できるなら回避した方が良い。

その身のこなしは、長瀬が放った苦無も軽く避けてしまった。千雨は苦無が飛んで行った方を見て、考える。

「ここには全部掴んでやった方がよかつたか？」

「そんなことされたら、自信なくしてござる、よシ……」「

森の中に飛んで行つた苦無の回収がめんどくさそうなので聞いてみたのだが、どうやらそんな親切心を出す必要はなかつたようだ。千雨はひょいひょいと長瀬の猛攻を避け続ける。

どうやって終わらせるかを考える千雨。使い慣れた太刀は間違いない長瀬にヤバいレベルの怪我をさせるため、使っていない。

あまり力を入れず、寸止めできるような攻撃を考えたが、そもそも攻撃といえば力いっぱい振り抜くようにしていた千雨は寸止めの経験がない。

そこまで考えて、此方が攻撃を止められないなら、逆転の発想で相手に攻撃を止めてもらおのはどうだろうと考えた。

とりあえず腕をつかんで、真横に投げてみることにした。振り下ろせば地面にぶつかるが、横なら受け身を取ることもできるだろう。伸びた状態の長瀬の腕に手を伸ばし、軽く手を当て、握る。

「なつ」

振りほどく暇をとれず、ぐるりとハンマーを回すように横に一回転。そのまま勢いよく投げる。気持ち上向きに投げ、体勢を立て直しやすくしてやる。

千雨の思惑通り、長瀬は受け身を取つてすぐさま立ち上がつた。

「おーい、こんなもんでいいか

千鶴の言葉に構えを解いて、歩み寄ってきた。

「いやあ、まつたくかなわぬでござる。強いでござるなあ」「ほとんど避けてただけだけどな。まあ、つまく手加減できるようになつたらまたやつてやるな」

それまで古菲がこなによつて上手く止めとこてくれ、と頬んでおく千鶴であった。

「帰るのでござるか」

「まあ、明日は明日でやつたこともあるしな
HPの更新とか写真撮影とか。マツコとこつ助手も出来たので、今までになかったタイプの写真も撮れるだろ?」

ネットアイドルの頂点に立つつもりとかはなくなつたが、マスプレは趣味として続けたい。戦う女の子の雰囲気とかもつまく出せるようになつてるかもしれない。

「あ、そうだ。先生、修業の方はビリですか?」

いきなり話を振られたネギが慌てる。

「え、えーと。そのですね」

「まあ、ヤバい状態になつたら助けにほこりますから。じゃあそつこう」と

そう言つて千鶴とマシコつさつと口をくつぶつとした。

「なにしてんだ、神楽坂」

「あ、千鶴ちゃん! えーと、そのね。ネギが」

「先生なら向こうで長瀬と修行中だ。心配はいらぬーだろ。それよりお前が遭難しないか心配なんだが」

明日菜は初めてその可能性に気付いたのか、顔を青くした。

「……えーと、案内してくれる?」「下山ルートならな。じゃあ行くか」「あ、でもエロオコジョがいない」「その辺にいねーのか?」「ちょっとー! ビニーフいたのよー。」

第9クエスト

学園都市停電の日。千雨は妙な胸騒ぎがしていた。

麻帆良学園都市には巨大な結界が張られており、電力でその結界を維持していると学園長から説明を受けた。

停電時には予備電源に切り替わり、一時的にパワー不足になるために侵入者がその時を狙つて侵入して来たり、学園都市内にある呪物が力を増したりと面倒なことが起こりやすいそうだ。

学園長はそれらを予知したのが原因ではないかと楽観していたが、千雨にはそうは思えなかつた。

「一応、知つている奴らにも注意しておくか」

まずは龍宮真名。

ほとんど千雨と同じような立場で魔法協会との関係を築いている彼女は、本来傭兵なのだそうだ。

胸騒ぎの事を伝えておいたら、「戦士の勘は、馬鹿にできないこともあるからね」と言つて去つて行つた。

本気してくれたかどうかわからないが、とりあえず注意はしてくれるだろう。

次は桜咲刹那。

何故かこいつは暇さえあれば近衛木乃香の後をつけている。

学園長の話だと木乃香の護衛だそうだが、一二、三度、要人の護衛任務をこなしたことがある千雨からすれば、緊急時とつとに動けないような状態で護衛が務まるのだろうか心配だ。

一応そのことも注意しておこう、そう決めて刹那に声をかける。先に胸騒ぎの事を伝え、ついで護衛の事を話したら急に顔色が変わつた。

「事情を知らないのに、簡単に言わないでください

「確かに事情は知らねーが、ライフルで狙撃されたらどうする?

突き飛ばしても近衛の命守れるのかよ

刹那はこれ以上話すことはないといったように、せつせつと行つてしまつた。

「なんか機嫌悪くなつたニヤ」

「まあ、まだ甘いな。命のやり取りとかしたことないのかね
人間とは時に、思わぬ卑怯な手段を平然とやるものである。軽い
犯罪の口封じのための殺人など、そういうことはこちらでもよく
行われている。

生き延びるために無茶苦茶なこともでかした千雨は、刹那が動
けなかつたときの為に、木乃香の事も気にかけてやることにした。
無論、そういうことが起きた時は学園長相手に報酬の支払いを要
求する氣であるが。

そしてネギ先生。

何やら浮かれていて、ちつとも氣を引き締める様子が見られなか
つた。話の途中にはたき倒してやるつかとも思つた。

最後にエヴァンジエリン。

「今日、何かまざいことが起きやつたな氣がするから、氣をつけお
いてくれ」

今までと同じように注意しておぐと、何故か雰囲氣が変わつた。

「なぜそう思う? 長谷川千雨」

「勘だ。だが、馬鹿にはできねー。何度もこの勘に命を救われたか
らな」

「……そつか、注意しておいてやる」

何故だか、にやりと笑つて踵を返す。

「アイツ、何かやらかす氣だな」

「それも勘かニヤ」

「どつちかといふと推測だ。学園長は学園結界が弱まるとい、中にあ
る悪い感じのものが力を増すとか言つてた。そしてあいつは吸血鬼
で、封印されて弱体化している」

多少、封印の力が弱まり、血を吸う」ともできるかも知れない。

次の満月まで先生を襲わないと言つていたらしげが、もしかすると

今日行動を起こすかもしれない。

学園結界の予備電源制御システムが何者かにハッキングされて、結界が弱まるのではなく、消えたらしい。

その事実を学園長は千雨の携帯に伝えてきた。ライフラインは別の予備電源を使っているようだ。

魔法先生たちは侵入者排除と電源復旧に大忙し。

「長谷川君も、侵入者の排除に手を貸してくれんかのう」

「はい、分かり……。いえ、先に依頼された仕事を片付けよつと思ひます」

「ふお？……そつか。君はこの謡ぎに乗じて、エヴァンジエリンが何かしでかすと考へているんじやな」

「……………そうですね」

「あい分かつた。ネギ君のことは任せよつ」

通話の切れた携帯をしまい、手早く装備を整えて、玄関から外に出て出る。

それと同時に降つてきた人影に向かつて睡眠薬を含む煙幕弾を投げつけた。

煙幕が晴れると、佐々木まき絵が眠りについていたのが確認できた。

「なんだ、佐々木か」

千雨達はまき絵を放り出したまま、エヴァンジエリンを止められそうな場所に移動を開始した。

エヴァンジエリンとネギの対決。どうやらそれはエヴァンジエリンの勝利に終わりそうだ。

「でも、あれだニヤ。魔法つてあんな派手に戦つものなのかニヤ？」

「あれで隠してゐつもりなのかね」

千雨はエヴァンジエリンに向かつて氣を込めた弓矢を構える。

「まあ、これで……」

終わり、そう考えたが、何故だか胸騒ぎが収まつていない。

瞬間、覚えのある氣配がした。とつとにそちらを見ると、世界樹の上空がゆがんでいた。

「なんだ、あれ……」

空が破れる。穴から出でてきたのは何度か戦つた相手。大空を舞つ、

白銀の太陽。

「リオレウス希少種……！」

第10クエスト【緊急】

穴はなおも広がる。現れたのはリオレウス希少種一頭だけではなかつた。

白銀の太陽と黄金の月。リオレウス希少種とリオレイア希少種が二頭づつ。計四体の火竜たちを吐きだして穴は閉じた。めったに見ることの出来ない火竜たちは、麻帆良の空を悠然と飛行している。

千雨は即座に携帯を操り、電話を掛けた。

「学園長、緊急事態だ！」

「長谷川君、なんじやね？……いや、此方にも報告が来た。ドラゴンが現れたそうじゃな」

「アイツらは私の世界の飛竜、リオレウスとリオレイアの希少種だ。実体のある生物だから、どうにかして落としてもよさそうな場所に誘導してくれ！ 火炎弾を吐くから街の防御も忘れるな！」

一方的に要求し、リオレイアの一体が地上に降りようとしたのを見て、王牙刀【伏雷】を振りぬき雷撃を放つ。

リオレイアは突然飛来した雷撃に驚き、上に逃げる。

「降ろしたら街が大惨事じゃねーかよ。無茶苦茶ミッショングルーン難しうぎるだろ」

気の使い方もだいぶ慣れた。力を入れれば、一撃で首を切り落とすことも出来るだろう。だが、そうすれば墜落した死体で街がめちゃくちゃになる。

「何とかして四体を、川か広い土地の上に誘導するしかねえ」

ちらりとエヴァンジェリン達の様子を見る。神楽坂明日菜がネギの助つ人に来て、戦いを続けていくようだ。

エヴァンジェリンの目的からすれば、戦いを続けることになるとは思ったが。

「…うちを何とかしろよ。全く

そう言つて千雨は虚空瞬動で、既に囮としてリオレウス達の前を
飛びまわるマツコリのところまで跳んだ。

またも地上に降りようとしたリオレイアを下から蹴り上げて、何とか着陸を阻止する。

「ああ、クソ。前は地面に降ろすのに苦労してたのに、なんだって地面に降ろさないよう苦労してるんだよ！」

彼らの下方を移動することはできない。いつプレスを吐くかわからない以上、下の方を向いた状態でプレスを吐かせるわけにはいかない。下に回るのは降りるのを阻止しなければならない時ぐらいだ。

「空飛んで戦うニヤんて、つて尻尾掠つたニヤ！！」

加えて初の空中戦である。虚空瞬動で飛ぶというより飛びまわる様な戦いはどうにもやりにくくて困る。気弾を放ち、銀色の巨体を川の方に向かつてぶつ飛ばした。

「せめて囮役一人くらいこよこせー！」

飛ばしたリオレウスが体勢を崩したまま墜落しそうになつたので、慌てて下から蹴り上げる。

そのリオレウスのつがいだったのだろうか、一頭のリオレイアが大きく旋回し、千雨と距離を離した。突進してくる気だろう。

だが、その行動は悪手。よつやく川の上にやつてきたリオレイアを千雨が捉える。

「いい子だ……。そのまま、墜ちる！」

右の翼の付け根から首にかけてを、氣で形成した巨大な刃で切り付ける。リオレイアは首と翼を同時に失い、川に落ちる。

「まず一体！」

つがいを殺された、先ほど体勢を崩していたリオレウスが、怒りからか千雨に向かつて突進していく。

「に、体目ッ！」

太刀を振るい、リオレウスも墜ちる。

残った二頭が、ようやく千雨を脅威と判断したのか、逃げる体勢に入つた。

「チイツ！！」

だが、逃げるのが遅かつた。誰かがやつてきたのか、リオレイアの方が雷で撃ち抜かれる。

「来るの遅いニヤ！」

怯んだりオレイアをマッコリが弾き飛ばし、千雨の方に落とす。「三体！」

頭から尻尾にかけて、背骨の当たりを通るようにまっすぐ氣の刃で斬り付けて真つ二つにする。

数さえ減らせば、千雨達なら何とでもなる。

マッコリがリオレウスの首を掴み、大量の氣で身体強化して勢いよく投げる。

「ラストオオオオッ！！」

千雨の構えた巨大な気の刃にまっすぐ突き刺さり、最後のリオレウスも絶命した。

鮮血が千雨の体にかかり、赤く染める。絶命したリオレウスをどけて、千雨は一息ついた。

ようやく麻帆良の街という面倒な守護対象を抱えた戦いが終わつた。

「……普通に飛ぶ方法、調べよう」

虚空瞬動だけの空中戦のやりにくさを体感した千雨は、ぞくぞくとリオレウスの死体を解体しながら、そつそつやいた。

麻帆良の街を守り切つた千雨は学園長からかなりの額をもぎ取つた。助けが遅れた不手際と、死者が出なかつたことがどれだけ奇跡的かを語ることで上手くいった。

「それにして、このよつたな竜が飛び回る世界とは……」

銀の鱗を触り、その頑丈さに驚く学園長。

「ソルジャーまでの奴はそろはいませんが、探せば結構見つかるでしょう。相手が一体でも、数限られた精鋭たちが入念に策を練つて掛かっていくのが普通になる化物ですよ」

それが一度に四体。戦争といつても過言ではない戦いになるだろう。

「なんとまあ……。そんな化物相手によつ無傷で勝てたものじや。」

長谷川君、君は一体何者じやね

軽く笑つて、千鶴は答える。

「最初に言つたでしょ。ハンターですよ」

第1-1クエスト

千雨は目をこすった。間違いない。自分の目がおかしくなったわけではない。

「お前ら何時の間に仲直りしたんだ？」

エヴァンジエリン達とネギ達が一緒にコーヒー飲んでいたので率直に聞いてみた。

「おや、長谷川千雨じゃ ないか。何か用か」

エヴァンジエリンの奴がすごく機嫌がいい。なぜだろ。

「行方不明の想い人の消息でも分かつたのか？」

勢いよく「一ヒーを吹き出した一同。エヴァンジエリンがネギを掴んでガクガク揺する。とりあえず引きはがして落ち着かせる千雨。

「当たりだったのか？」

「き、聞いていたわけじゃないのか？」

違つと言つておく。意味なく藪をつつく必要もあるまい。

「……ああ、聞いたぞ。お前は昨日竜種を四頭も倒したとか

「ええっ！？ 千雨さんすごいです！」

無理やり話題を変えたエヴァンジエリンにせられるネギ。

千雨は適当にネギをあしらいつつ、考えるのは昨日の事。リオレウス達が来たという事は、向こうの世界でも何か起きているのだろうか。自分の内の人と相棒をこちら側に落とした現象を思い出す。

(アレ相手じや、どうしようもないけどな)

気の扱い方を覚えた今でもそう思う。天災クラスの古龍が、あの程度といつてしまえるほど次元違ひだ。

とりあえず、今すぐは何も起きないとは思うが、これから先何が起きるかわからない。魔法などという超技術が存在するのだから。「そういうや来週から修学旅行だけど、エヴァンジエリンはどうなるんだ？」

「……ああ、麻帆良から出る」ことはできん。封印は解けていないからな」「

ネギが微妙な顔をする。エヴァンジエリンはそんなネギにくるりと向き直り、ニヤリと笑う。

「坊や。一つ情報をやろう。京都には奴が一時期住んでいた家があるはずだ。そこに何か手がかりがあるかもしれん」

「ほ、本当ですか！」

「ここで嘘を言つてどうする」

千雨は一応好奇心で聞いてみる。

「奴つて誰の事だ？」

「ネギのお父さん。エヴァンジエリンをここに封印した人だつて」明日菜が答えてくれたが、あまり興味が出る話ではなかつた。

手痛い出費を強いられた関東魔法協会は、その出費の原因である四頭の火竜の事を調べていた。

「おや、もう来るとは。何かわかつたことでもあつたのかね」

学園長は明石教授を迎える。千雨は素材になりそうなところは殆ど採りつくしたので、お零れの肉片や骨の破片、斬つてしまつた鱗の部分などで何とか調べている状態だ。

無論そんなところで全体を把握することが出来るはずもないが、もう出現しないとは言い切れない。その時の対処方法くらいは一応の形にしなければならなかつた。

「あの、これは本当に生物の鱗なのでしょうか？」

「何をいつとるんじや。君が直接死体から採取したじやね」

明石教授は机の上に綺麗に切断された大きな鱗を置く。

「頭部の鱗です。強度の測定をするために金属製の切断機で整形しようとした所……」

明石教授の指先が、鱗の端、ほんの一寸欠けた部分を指さした。

「……まさか

「刃が、折れました。バーナーで焼き切る方法も考えたのですが……」

相手は火竜。同族同士の争いなどでプレスを使用する可能性を考えたら、たいして効果は出ないと思われる。

「これからウォータージェットでの切断を行つ予定です」

「この切断跡は……」

「最初からあつた物。すなわち長谷川君が切つた跡です」

何とも言えない空気が漂う。

しばらくして学園長の口から出たのは次の言葉だった。

「……頑張つてくれ

「……はい」

「関西呪術協会ねえ」

関東魔法協会と仲の悪い組織で、考えの足りないものが何かちょっかいをかけてくるかもしれないから気を付けておくようにと学園長に言われた。

気をつけると言われても、正直何を気を付ければいいのか。愛用の王牙刀【伏雷】は目立つから持つていけないだろうし、マジコリを連れて行くのも難しい。

「まあ、僕はここいら辺の猫の世話をでもしてやる一いや。行ってみたい氣もするけど、窮屈な思いをするのはちょっと一いや」

「だよな」

相棒の不参加を考えると、武器の一いや一つあつた方が良いのだろうか。しかし今更ただの鉄刀に命を預けるのも妙な気がする。修学旅行に命の危険など在つてたまるかと思うが。どうしたものかと千雨は王牙刀を見ていた。

第1-2クエスト

修学旅行初日、関西呪術協会のいたずらのような妨害工作が何度か行われた。

夜、千雨はいたずらに使用された酒を飲みながら考える。これは鉄でもいいから刀を持つてくるべきだったのだろうか。

武器は結局持ち運べそうなものしか持つてきていない。ナイフに薬品、ワイヤーなどの小道具、双剣と折り畳み式の弓矢。まあ、身を守るには十分か。

「千雨ちゃん、いる？」

明日菜が三班の部屋にやつてきた。何やら急いできたようだが、言いづらそうに口を開けたり閉めたりしている。

「あー、わかった。那波、ちょっと行ってくる」

「就寝時刻だから、できるだけ早くね」

「はいよ」

ぱたんとドアを閉めて確認する。

「また魔法関係の話か？」

「そうなの。しかも今回このかが攫われそうになつて……」

「手を借りたいってことか。分かった」

明日菜についてロビーまで降りると、ネギと桜咲刹那が座つて待つていた。

「あ、……長谷川さん」

刹那は千雨を見て、少し俯ぐ。この間の護衛の話を思い出したのだろう。

「えーと、なんだ。まあ頑張れ？」

千雨は取り合えず励ましておいたが、気の無い言葉なのであまり効果はないだろう。これでやり方を変えるかどうかは刹那の判断次第だ。

「千雨さんは、刹那さんが味方だつてことは？」

ネギが訊いてきたので、とりあえず知つてることを答えておく。

「魔法生徒で、剣士。近衛の護衛役をしてるくらいは」

「姉さん、知つてたら教えてくれたっていいじゃねえかよ」

カモが文句を言つてきたが、尋ねてもいないのでから教えようがない。

「とりあえず、対策会議だ。桜咲、お前が一番知つてるんだろ？
話を始めてくれ」

「はい。……敵はおそらく関西呪術協会の一部勢力で陰陽道の『呪符使い』、そしてそれが使う式神でしょう」

そして、呪符使いと、関西呪術協会と京都神鳴流の関係を説明する刹那。

木乃香の護衛についても説明したが、千雨は口を挟まなかつた。

「よし、じゃあ決まりですね。3・A防衛隊結成ですよ！ クラスのみんなを守りましょう！」

ノリノリで名称を決めたネギ。そこでふと千雨が気が付いた。

「誰かこっちの様子を伺つてるな」

「え、本当ですか。一体どこから？」

ネギの質問に、少し考えて千雨は答えた。

「たぶん、外だ。ちょっと行ってみてくる。お前らは中で守りを固めといってくれ」

「あ、僕も行きます。他の先生に見つかるとまずいかもしれないですから」

外に出ると、ホテルの従業員がちらりとこちらを見た。怪しいが、ここで捕えたところで何とでも言い逃れはできるだろ？ 何より、此方を警戒しているのはまだ外にいる。

千雨は中の一人に警戒を強めるように連絡することにした。

「先生、二人の携帯番号分かりますか。話しておきたいことがあります」

「お、ちょうどいい。仮契約カードで念話ができるんだ。兄貴、試してみてくれ」

「うん！ あ、千雨さん。何を話すんですか？」

「さつき入口ですれ違つたホテルの従業員が怪しい。警戒してくれ」

「え、た、大変！ 戻らなくちゃ！」

ネギが止める間もなく慌ててホテルに戻る。

「あー……。しょうがない、私はこっちを探すか」

さて、狩りの始まりだ。獲物に狩られる立場であることを思い知らせてやろう。

千雨は気配を殺し、瞬動でその場から一気に離れた。

獲物は驚愕した模様、即座に気配を探りにかかった。遅い、既に居場所は特定した。だが、瞬動に入ろうとした直後、向こうも気配を殺して移動したのが分かつた。

「チツ！」

どうも相手側もかなりできるようだ。相手は既に撤退を決め込んで、瞬動した模様。夜の京都で超速の追いかけっこが始まる。

敵は完全に逃げに徹し、あちこちジグザグに移動を繰り返す。

「なかなかしぶといじゃねーカ

だがこちらは狩人。やみくもに逃げ回るだけの獲物など何度も捕まってきた。相手がビルの屋根の上に移動した瞬間、真っ白い煙が撒き散らされる。

「良しつ！」

既に投げておいた煙幕弾が爆発する瞬間を狙つて、相手をそこに着地させることに成功。相手がつるたえて、またも瞬動で逃げるが、もう勝負はついた。

煙幕弾には特製の麻痺薬が仕込まれており、ほんの少し吸い込むだけで一気に動けなくなる。たとえ煙幕を直接吸い込まなくとも、衣服に付着した分を後で吸い込んでしまう極悪品だ。

瞬動で加速したまま勢いよく飛び出した敵は、ビルの壁に激突す

る。

「捕獲完了」と

中和剤を回りにまき散らしながら、ビルの壁からずり落ちた敵のところまで移動する。付けていた覆面をはぎ取つて、相手の顔を確認してやつた。

「ん？　こいつは……」

どこかで見たような記憶がある。とりあえず、ワイヤーで縛り上げて、解毒剤を注射してやる。しばらくして解毒剤が効いてきたのか、口を開いた。

「…………う、うう、ひ、ひどいっス……」

その口調で思い出す。一時期弟子にして、じいたま扱いてやつた年上の女狩人。

「紗奈じゃねーか

向こうの世界の住人が、又もこちいらに来ていたことに驚いた。

第1-2クエスト（後書き）

オリキキャラ登場

第1-3クエスト

紗奈。読み方はサナで、年齢は現在十七。ユクモ地方近くに存在する村で生まれたハンター。

突然ユクモ村にやつてきて千雨に狩り勝負を挑んできたので、ちようじ受注したばかりのティガレックス討伐で勝負を決めようと言つたところ、一気に怖気づいた。

話を聞くと、ユクモ村にすごいハンターが来たとだけ聞いて勝負しにやつてきたのだが、飛竜討伐の経験はないらしい。

殆ど見学に近い形で千雨の後についてきて、ティガレックスを一人で仕留めて見せたところ、弟子入り志願してきた。

しかたなく千雨の狩りに同行させて、弟子として荷物持ちにしたり囮にしたりした。結果として一年で逃げだして、どこかに行方をくらませる事になった。

風の噂では一人でリオレウスを倒すことに成功したと聞いたが、峯山龍狩りには毎回不参加だった。

彼女が話した千雨の狩猟訓練の内容は多くのハンターに知れ渡り、アマツマガツチ討伐を成功させた千雨の元に弟子入り志願者が来ることは一度もなかつた。

見た目は3-Aの生徒に劣らないような長髪の美少女。性格は残念。

「なんだつてお前が近衛の誘拐なんぞすることになつたんだよ」

「行方不明になつた師匠が悪いんスよ！」

千雨達が嵐龍調査の帰還予定日になつても帰つて来ない。その事態を重く見たギルドは腕利きのハンターを招集し、千雨達の捜索を行わせる事を決定した。

千雨の弟子であつた紗奈もギルドからの要請（殆ど強制）で捜索に参加し、靈峰までやってきた。

紗奈はそこにあつた巨大な穴に足を滑らせて墜ちてしまい、気が付いたら見知らぬ土地に一人のハンター。

今までの常識も通用しないこの場所で、助けてくれたのは天ヶ崎千草という女性。

あれこれ世話を焼かれてお礼がしたいと言つたら、なんだか関西呪術協会という組織に反乱するような計画に参加することを要求された。

千草以外に頼るものがいない紗奈達は、悪いことだと思いつつも、泣く泣く計画に協力する事にしたのだった。

「オイ」

「わかつてゐ！ わかつてゐッスよ…… でも仕方ないじゃないッスか！ 生きる為ッス！」

拒否したもう一人ハンターの武器が、月詠と呼ばれる少女の太刀で斬られたので仕方なく手伝うことにしてみたのだそうだ。

「うう、敵は巨大ッス。なんたつて呪術とか呼ばれる訳わからん変な技使うし、氣とかいう謎の光を自在に操る奴らッス。組織の一派もアイツら支援してるとか聞いてるッス」

千雨はとりあえずため息をついて、紗奈に尋ねる。

「で、お前は何で逃げた」

「……もし本当に師匠なら、こんなことしてると知つたら殺しに来ると」

氣は使わず、頭をはたいてやつた。しばらく悶絶した紗奈は顔色が悪いまま、嬉しそうに言つ。

「でも、師匠がいればあんな奴らには負けないッス。雷堂さんも味方に付けてけちょんけちょんにやつつけてほしいッス！」

雷堂、たしかハンマーを愛用するハンターだつたか。

「じゃあまず、アジト叩くか。お前も知つてるよな

「もちろんッス！」

立ち上がり、紗奈を縛るワイヤーをほどく。紗奈も立ち上がって体の調子を確認する。

「やつこやお前、気を使つてゐるじゃないか。戦おうとは思わなかつたのか？」

「は？ 気は使えないッスよ。こつち来て覚えたのは瞬動とかいうすごい歩法だけッス」

「いや、それ気を使って移動する方法だから」

寒い風が吹く。

「な、なんだつてー！」

結局アジトはもぬけの殻だった。もしかしたら雷堂が来るかもしないので、ハンター達が使う暗号で手紙を書いて帰る。

ホテルに帰ると、明日菜とネギがうろうろしていた。声をかけると明日菜が怒つたように言ひ、「千雨ちゃん！ どこ行つてたのよ。こつちは大変だつたんだから！」

「脅されて仕方なく手伝つてた敵の一人を捕まえて、アジト叩きに行つてた」

ほらコイツ。親指で紗奈を指さしていう。

「あはは、どうもッス。このたびは多大な御迷惑をおかけしたよう

で……」

明日菜とネギがぽかんとする。

「て、敵！？」

「なんで捕まえてないのよー！」

「知り合いでな。こいつにはわたしに逆らつくなつて脳はねーよ。とりあえず、状況説明のために桜咲呼んでくれ」

話はそのあと。そう言って千雨はロビーの椅子に座る。

「師匠、なんだかこいつの事かなり詳しいッスね」

「その辺の理由も話すから、大人しくしてろ」

刹那もやつてきて、一同が椅子に座った所で千雨が口を開く。

「まず話しておくことがある。」いつも紗奈つていう名前なんだが、この世界の住人じゃない

「は？ 魔法世界の住人ってことすか」

「話の途中だ馬鹿オコジョ」

凶暴な猛獸達が闊歩し、ハンターという一部の鍛えた人間が、人々の安全と自分たちの利益のためにモンスターを狩つて、生活を送る世界。

「私も、半分だけその世界の住人だ」

「半分？」

「今学期の始業日に駅のホームに人が落ちた事件があつたる。あれ私だ。あの時こっちで電車にひかれそうになつた長谷川千雨と、向こうでハンターやつてた千雨が融合したんだよ」

「融合、ですか？」

「詳しいところは分かつてねーがな。とにかくそういうことが起きた。だから半分。こっちの事をよく知つてるのも、長谷川千雨がこっちに居たからだ」

後半紗奈に向けて説明したのだが、全然わかつてなさそうな顔をしていた。

「まあ、この馬鹿は向こうの人間なんだ」

「馬鹿つてひどいッスよ！」

「背骨折られて、背中とふくらはぎが綺麗にくつつく状態になりたくなかつたら黙つとけ」

「はい師匠！」

馬鹿弟子が抗議をやめたので話を続ける。

「マツ「リも向こうの世界の住人だ。停電の日に空から降ってきたあの竜たちもな」

「なんか来たんスか？」

「希少種のリオが雄雌二匹づつ

「あらまあ。どんだけ死んだッスか」

軽く、常識のような口調で放たれた紗奈の言葉に凍りつく明日菜とネギ。刹那はそこまでいかなかつたものの、やはり体を堅くしていた。

「幸い、誰も死んでねーよ。私が四匹片づけた」

「こっち来て化け物にでもなつたッスか?」

「背骨」

「はい！」

紗奈を再び黙らせる。さて、どこまで話したか。

「とにかく、そんな奴らが空飛んでる世界だ。ここまで何か質問は?」

そう問うが、よく考えたら本筋に関係ない話だ。すぐさま質問が出てなかつたので話を続ける。

「でだ、こいつと後一人の腕利きのハンターが、近衛の誘拐の計画者である天ヶ崎千草つて女に拾われた」

「あのおサルの女?」

明日菜の質問が来たが、顔を知らない事に気が付く。

「紗奈、似顔絵」

「はい！」

さらさらとメモ用紙に似顔絵を描かせる。何処で身に付けたかよく分からぬ紗奈の特技だ。

描きあがつた似顔絵を見ると、ホテルに侵入してきた女だった。

「……似てますね」

刹那の評価である。

「計画者が直接やつてきたのか」

「そつツスね。後ろ盾はあつたみたいッスが、実際に行動してたのはコイツと月詠つて剣士。あとは私と雷堂というオッサンハンターが脅されて働かれてたッス」

千雨は天ヶ崎千草の似顔絵を握りつぶす。

「敵の情報はそんなどころだ。今後増えるかもしれないがな」

その後は実際に戦つたネギたちの情報を聞いて話は終わった。

「夜の警戒はどうしましょう」

「私と紗奈がやつとく。桜咲は、徹夜したら全力で戦えるか？」

刹那は首を振つてこたえた。

「私もやるッスか？」

「当たり前だ。ちょうどいいからお前に気の使い方も教えとく」
うへえ、と変な声を出した馬鹿弟子を連れて、深夜の警戒のため
に屋根の上に上ることにした。

第14クエスト

夜間の襲撃はなく、一安心した所で朝食を食べるために戻る。紗奈の分は用意できていないので、適当な店で買わせるか食べさせることもりだ。

ちなみに紗奈に氣の使い方を教えたが、魔法関係者の証言通り簡単に身に付くものでは無く、身体強化ぐらいしか覚えられなかつた。それでも驚異的なのだが。

「千雨さん、結局戻つてこなかつたけど何かあつたの？ なんだか寝不足みたいだし」

那波千鶴が心配した様子で声をかけてくる。とりあえず大事なとこをぼかした話でごまかす。

「ん、こつちに居た知り合いが面倒事に巻き込まれてな。……ああ、まだ面倒事は片付いていないから後でちょっと別行動することになるかもしれません」

「ちょっと千雨さん、今は修学旅行中ですわ。団体行動を「しようがないだろ、いいんちょ。人助けなんだから。ネギ先生も助けてくれるつづうし」

ネギの名前が出た途端、やはり態度を変える雪広あやか。

「それならしかたありませんわね。ところで私にもお手伝いできることがあるなら何でも言つてくださいな！」

「今んとこ必要ねえ。……いや、必要になつたら先生が言つだらうからそんな落ち込むな」

ネギに協力して好感度を上げるつもりだったようだ。

その後勝手に自己完結して、勝手に燃え上がり始めたあやかを見て、千雨は食事に戻る。

何故か刹那が木乃香に追いかけられている光景が見られた。

木乃香は刹那と仲良くなりたいのだろうか。まあ、友達として近くにいる方が護衛はしやすいだろうと千雨は考える。

昼の襲撃もなかつた。紗奈に對して相手が接觸してくる事もなくホテルに戻ることに。

「昨日負けたから人員を増やすつもりッスかね」

「顔合わせとかした、動きそうな奴らに心当たりはあるか?」

「んー、なんか白い髪の男の子がなんか興味示して会いに来たッスけど」

とりあえず似顔絵を描かせ、警戒対象として頭に入れておく。

「明日は神楽坂と先生が抜けるから襲いやさしいと思うかもしれん」

「そつちは一人だけでいいッスか?」

「構わねえ。奴らにしてみれば近衛の方が本命だからな」

そうして対策を練つていたのだが、ネギからの連絡で一度集まつて欲しいと言われた。

「魔法がばれた?」

「しかも朝倉に?」

明日菜が呆れていたが、尤もだと千雨は思った。魔法使いは本当に魔法を隠す氣があるのだろうか。

そのあとすぐに朝倉がやってきて、秘密を守るだのといつていたが、千雨はどうにも信じられなかつた。

ネギに注意するように言つたが、結局無駄に終わる。『ラブラブキッス大作戦』と言つたりないイベントは決行された。

結局十一人の生徒と、巻き込まれたネギが正座をする羽田になつた。

千雨としてはどうでもいい仮契約カード講座が終わり、千雨は二班から離れて紗奈と行動する形となる。

少し離れたところで分かりやすいように木乃香の周りを警戒しているのをみせて、相手が手を出すのをためらうような状態にしたのだが。

「ずいぶん大胆だな。月詠さんよ」

白昼堂々と刹那に向かつて棒手裏剣を投擲してきた。現在相手は二人。月詠と髪の白い少年だ。

月詠に話しかけながらも、警戒するのは少年の方。千雨の勘が危険な相手だと訴える。

刹那達は即座に逃げを打ち、既に遠く離れているが、この程度なら瞬動ですぐに追いかけられる距離だ。

「あまり邪魔しないでもらえまへんか？ ウチは刹那センパイと死合いたいんです」

「僕たちの目的は近衛木乃香だったはずだけど

おそらく千雨では一人の相手は無理だ。となると自然と組み合わせは決まってくる。

「紗奈、お前が月詠とやれ。私はあの白いのとやる」

「む、無茶言わないでください！ アイツ、ストライプストライク斬つたツスよ！」

「今から武器強化間に合わせねばどうにでもなんだろうが」「はあ、紗奈はんがお相手どすか。腕はいいみたいですが、そんなに簡単にいきまへんよ？」

逃げ腰の紗奈は、それでも気による身体強化を始める。つつすらと飛竜刀【双火】に気の光がまとわりついた。それを見た月読は、薄く笑つた。

「つーわけで白いの。てめーの相手は私がやる」

「僕としては近衛木乃香を渡してほしいんだけどね」

「却下だクソガキ」

出し惜しみをしても少年は倒せないと判断した千雨は莫大な量の気を纏う。髪の毛が舞い上がり、漫画の戦闘民族のように千雨の周りが発光する。

「……君を放置したら、面倒なことになりそうだ。仕方がない」
少年も気を、いや魔力だろうか？ 光を身に纏い、臨戦態勢に入る。

「氣も魔法も隠匿するものなんだけどね
「あいにく私はハンターだ。殺し合いの最中に魔法使いの事情などを考慮する氣もねーよ」

双剣を瞬時に取り出した千雨は一気に切りかかる。少年の手の中に現れた石の双剣とぶつかり合い、戦いが始まる。

そしてこちらは逃げに回った刹那達。シネマ村に逃げ込んだのが、目の前に長身で少し細身の男が立ちふさがった。即座に愛刀の夕凪に手をかけた刹那だったが、男は両手を上げる。
「私は雷堂というのだ。警戒しなくていい」

「雷堂、長谷川さんのお知り合いの……」

「長谷川？ ああ、あちらにいる千雨嬢とは知り合いで」
そうして雷堂が見たのは町中で立ち上る氣の光。

「長谷川さん……」

まったく氣を隠す氣がない千雨に一瞬あきれるが、その莫大な気をみて、そつまでもしないと勝てない相手がいることを知る。

「ええと、雷堂さんやね。千雨ちゃんの知り合いがなんでウチらの所にきたん？」

「木乃香嬢。実は今、君の身柄を狙う奴らがいるんだ」

「ツ！ 雷堂さん！」

「いや、ここで隠しても仕方あるまい。木乃香嬢、私は君を助けるつもりだ」

そうして雷堂は一通の封筒を差し出す。

「すでに君の父君には話しておいた。これが証になるかはわからぬが、御実家に避難するべきだ」

木乃香があけた封筒には、確かに近衛詠春、彼女の父の文字ですぐに家に来るようにな書かれていた。

「わかりました。雷堂さん、一緒に」

「そりはいきまへん！」

轟音を立てて落としてきたのは、天ヶ崎千草と彼女の式神、そして化物。

「チツ、まさかあんたら一人とも裏切るとはな」

「ふん、殺すと言われた程度で屈するほど、私の誇りはやわではなさいさ」

刹那と木乃香を隠すように雷堂は体を移動させる。

「まあええ、もうこいつなつたら力ずくや。このか御嬢様は渡してもらうで！」

天ヶ崎千草の命令で襲い掛かる式神たち。だが雷堂は拳を引いて殴りにかかった。

「おそるるに足らず！」

吹き飛ばされたのは、猿の式神。ついで回し蹴りを熊の式神に叩き込み、又も吹き飛ばす。

驚愕する天ヶ崎千草。

「この程度ならば素手でも十分！　轟竜の頭を叩くより容易いわ！」
だが、その間を縫つて化物が動く。少し離れてしまつた雷堂は反応が遅れ、刹那達の方に通してしまつた。化物の手が木乃香に迫る。

「木乃香嬢！」

刹那が動く。木乃香を突き飛ばして、化け物のから遠ざける。そのまま化物の振つた手は、刹那の体を引き裂いた。

「せつちゃん！」

木乃香が崩れ落ちる刹那に飛びつき、まばゆい光を放つ。

「なつ！？」

天ヶ崎千草の驚愕の声。光が収まつた時には、木乃香が傷一つ無い刹那を抱きかかえていた。

「お、嬢様……？」

「せつちゃん！ 大丈夫！？」「

「……これが、このか御嬢様の力」

驚愕する天ヶ崎千草。

「天ヶ崎千草ッ！ 許せぬ！」

殴りかかる雷堂、だがその拳は空を切った。

「やれやれ、相手が悪いね」

白い髪の少年が天ヶ崎千草を抱えて、離れたところに立っていた。

「フェイト・アーウェルンクス！」

雷堂の怒りの声をきいても、フェイトと呼ばれた少年は顔色を変えずに淡々と言った。

「この場は引かせてもらひよ

「こら新入り！ 何勝手なことを

「来るよ」

フェイトの宣言通り、空から降つてきたのは千雨。双剣をもつて大地をへこませる一撃を繰り出した。

「くそ、避けやがって」

「さつきも言つたけど、退却させてもらひよ。じゃあね」

そう言つてフェイト達は砂嵐を発生させて消え去った。

「くそ。転移とか出来るのかよ」

千雨の文句は届く相手もいなかつた。

第15クエスト

月詠たちの襲撃よりも前の話。

関西呪術協会の総本山に向かつていたネギと明日菜。途中天ヶ崎千草の罠によつて足止めを食らい、狗族の少年によつて大打撃を受けた。

刹那の放つた式神のアドバイスと機転で何とか撤退することが出来たものの、いまだ敵の術中。少年を倒し、罠を解かなければ進むことが出来ない状態にあつた。

「勝算はあります。任せてください」

宮崎のどかは『ラブラブキッス大作戦』で手に入れた仮契約カード、それを変化させて出現した、いどねえにつきを用いて状況を把握していた。

いどねえにつきに出てきた先のネギの言葉に、のどかは安堵し、同時に興奮した。

「す、すごいです。ネギ先生はあの強い男の子相手に勝算が……」
その時、周りの竹林をかき分けて何者かがのどかに迫つてきていた。慌てて本を仮契約カードに戻したところで、少年が突つ込んできた。

ぶつかり、転倒した二人。

「ああ、わざとやないんや！ 人違いや！」

少年はのどかに謝り、魔法関係をぼかした状況を説明する。

「後で罷解いて、お姉ちゃんだけ出したるわ」

その言葉で、ネギと戦つていた狗族の少年が目の前の人物と同じであることを知る。

どうしたらいいのか考えて、いどねえにつきの使い方、名前を知ることで読心できる事を思い出す。

「あの、私……宮崎のどかです。あなたのお名前は？」

「小太郎や、犬上小太郎！」

「白き雷！」

ネギの魔法が小太郎に直撃する。しかし、防護の護符を破壊するまでにとどまり、決定的なダメージは与えられなかつた。

小太郎のラッシュがネギを襲つ。明日菜は小太郎の狗神によつて動けなくなり、救出は不可能。

「勝つたで！ とどめや！！」

小太郎が力を込めた一撃を放とうとする。しかし、ネギが狙つていたのはその一撃が生み出す隙。

「契約執行0・5秒間、ネギスプリングフィールド」

無理やり自分の体に魔力を注ぎ込み、強化する。小太郎の一撃をそらし、驚愕した所を殴り飛ばす。

「闇夜切り裂く一条の光、我が手に宿りて敵を喰らえ」
浮き上がつた小太郎の下から手を添え、魔法を放つ。

「白き雷！」

ゼロ距離から放たれた一撃は、小太郎の体を打ち据える。倒れこんだ小太郎に向かい、ネギは言い放つ。

「これが、西洋魔術師の力だ！」

倒した。脱出方法を探そうとするネギたちは、後ろからかけられた声に驚く。

「さつきのは取り消す。だが、まだ終わらへんで！」

小太郎は最後の力を振りしぼり、獣化する。

「こつからが本番や、ネギ！」

立ちはだかる小太郎に、ネギはさらに自らの体に魔力を注ぎ、相手をしようとする。

だが、獣化した小太郎のスピードは速く、ネギの目では追い切れなかつた。

「左です、先生ー！」

突如かけられたのどかのアドバイスに助けられ、回避に成功する。続く小太郎の攻撃ものどかの読心によつて回避するネギ。

「小太郎君、ここから出るには、どうすればいいんですか！」

小太郎はその言葉を聞いて、瞬時に脱出方法を思い浮かべてしまう。気が付いた時には遅かつた。

のどかの罠の基点を教える言葉に、隠された印を魔法の矢で破壊するネギ。

刹那の式神が罠を逆に利用して、小太郎を閉じ込めて、戦いは何か勝利した。

紗奈と月詠の戦いは、対人戦闘の経験がない紗奈が押され、終始月詠のペースで進められた。

「紗奈はんも随分やりますなー。結構好きになりそうどすー」

「こっちとしては戦闘狂なんか願い下げッスよ！」

紗奈は初撃でまともに打ち合つのはやめた。力は自分が上だが、打ち合つたときに飛竜刀【双火】がわずかに掛けたのを見て武器強化が未熟だと知り、武器を折られることを避けたのだ。

基本的に攻撃をそらし、避ける状態ではあるが、少しだけ斬りに行くこともある。月詠には軽々と避けられるが、今の自分ならティガレックス相手でも真っ向から向つていける力をつけたと感じる。押されっぱなしではあつたが、フェイントが撤退を決め、月詠に声をかけたところでわざかに出来た隙を使い、刀を弾き飛ばした。

弾き飛ばした刀は千雨が斬つてしまつたので、月詠の刀は一本。攻撃が減つたことで出来た隙を使い、月詠を気絶させることに成功。おととい千雨が使つたワイヤーを使い、縛り上げた月詠を担いで、千雨と合流しに行く。

「まあ、何とかなつて良かつたツス

出来れば人相手の斬り合いなど、一度とやりたくはなかつた。

千雨と合流した時、雷堂も一緒にいた。

「雷堂さん、無事だつたツスか。いやはやよかつた」

「ああ、これから木乃香嬢達の着替えが済み次第、関西呪術協会に向かつ」

「……大丈夫ツスか？」

「すでに長の協力は取り付けてある。向こうもすでに動かせる人員を集めてこる最中だ」

その言葉に安心する紗奈。

「これでようやくお天道さんの下を堂々と歩けるツスよ。誘拐犯一味なんて御免ツス」

「お待たせいたしました」

「わあ、じつちが紗奈さん？ 美人さんやなー」

紗奈の容姿をほめる木乃香。しかし千雨は容赦なく紗奈をけなす。

「見た目だけな」

「ひどいツス、し……千雨ちやん」

弟子だから敬意をもつて呼べと言つたのは千雨だが、事情を知らない人がいるところで師匠と呼ぶのは止めろとも言われている。

「では行くとするか」

雷堂の言葉につなづく一同、そこへ早乙女ハルナと綾瀬夕映、そして朝倉和美がやつてきた。

「ちょっととちょっと、千雨ちゃん！ 一体何がどうなつてるのか説明してもらおうじやないの！ どつかの戦闘民族みたいに光つてたりしたのはどーいう事！」

「あー、あれだ。超特製の、手品道具？」

「ああなるほど、超りん特製なら仕方ないか……つてなるわけないつしょ！ いない！」

千雨達は忽然と姿を消していた。

「逃げられたー！」

ハルナの声に、笑いながら朝倉が告げる。

「ふふふふ、こんなこともあらうかと！ 桜咲さんの荷物にGPS

携帯しきこんだきました！

「おお！ やるじゃん朝倉！」

バシバシ朝倉の肩をたたいてほめるハルナ。

「ところで、あの女性がゴスロリの女の子を抱いでいたのは、何故だつたのでしょうか？」

夕映の疑問に答える者はいなかつた。

木乃香を瞬動で運ぶわけにもいかなかつた千雨達に追いついたハルナ達。

今から向うのは木乃香の実家であることを仕方なく告げて、一緒に行くことにした。

明日菜たちにも合流して、木乃香の実家、関西呪術協会総本山に入る。

協会の者に捕えた月読を渡し、呪術協会の長の詠春に親書を渡してひとまず仕事が終わつた。

しかし、千雨の勘は本山に入った所で何か危険なものを感じていた。

ちなみに雷堂は明日菜に気に入られたようだ。

第1-6クエスト【狩獵環境不安定】

関西呪術協会では東からの特使のネギたちを歓迎する宴が開かれた。

「その中で、難しい顔をする千雨。酔っぱらった弟子が絡んでくる。
「ししょー、どうしたツスかー？」

「フヨイトだつたか、奴が仕掛けっこないのは何故だ？」

「ふえ？ ししょーにおそれをなしたツスよ。きっと」

それはないだろう。奴はまだ力を隠していた。それはこちらも同じだが、気や魔力といった超常の力においてはあちらの方が上手だ。

「雷堂、アンタはどう思う？」

「奴は『この場は引かせてもらひ』と言つていた」「まだ仕掛けてくるつもりなのだらう」と雷堂も判断しているようだ。

「アンタは氣は使えなかつたな」

「ああ、口惜しい限りだ」

千雨は立ち上がり、紗奈に小瓶を渡す。

「酔い覚ました。それ飲んで雷堂に氣の使い方教えておいてくれ。要領としては鬼人化と同じだ。もっと大きな力を汲み上げて扱うつもりで行けば出来るようになると思うが」

千雨のアドバイスに頷く雷堂。紗奈は仕方なく酔い覚ましを飲んで、咳き込んだ。

「『ふつ、げはつ、師匠、これ苦過さるツス！』

「千雨嬢、君は何を」

「ちよつくり腕がなまつてている剣士がいるみたいだからな。対人戦のやり方教えてもらひついでに、勘を取り戻してもらひ」

そう言つて千雨が視線をやつた先にいたのは、関西呪術協会の長、

近衛詠春。

風呂場で一騒動あつた後、道場に千雨と詠春がやってきた。

「しかし、そこまでの体捌きでありながら対人戦の経験がほとんどないというのは……」

「まあ、化け物相手にしてただけですから。その点では貴方達神鳴流剣士と同じですかね」

驚く詠春、千雨にどうしてわかつたかを聞くと、推測だと答える。「体捌きなんかが、桜咲や月詠とかいう奴と似てた点、あとは呪術協会と神鳴流の関係が深いって聞いてましたから。剣士の貴方が呪術協会のトップになる理由はその辺にあるかなと」

そうして詠春から竹刀を受け取った千雨が、その瞬間に竹刀の先を詠春の首に付きつける。

「……いきなりこう来るのは」

「いやまあ、隙だらけだったもので。実戦は一瞬で斬られますからね」

少しばし危機感を持つたかと尋ねる千雨。詠春は笑いながら、千雨の後ろに常人の目では追えない速さで回り込み、頭をめがけて竹刀を振る。

ぱしばしと竹刀が鳴る音が鳴り続ける。距離を取らずに双方がすさまじい速度で竹刀を振り続けること一分。

「じゃあ、準備運動も済んだし、始めましょうか」

「ええ」

詠春の同意の言葉と共に、千雨は気を使わない状態の最高速度を出す。詠春が千雨の攻撃を防ぐために振った竹刀とぶつかり、乾いた音を立てて一つの竹刀が使い物にならなくなる。

「……竹刀つてこんなもろいのか」

「神鳴流剣士が訓練に使う特別性なのですがね。気を使う条件で続けますか?」

「やめておきます。ここが吹っ飛びそうだ」

それに目的は果たしたようなので、千雨としては続ける理由がなかつた。

「太刀を貸しましようか?」

詠春の申し出に、首を振る千雨。

「もう届いたみたいですから」

そう言つた千雨の視線の先には、道場の入口に立つ、愛刀を背負つた相棒がいた。

「まったくネコ使いが荒いニヤ。後で持つて来いといふくらニヤから最初から持つてけばよかつたニヤ」

麻帆良から人目に付かないように走つてきたマツコリは、愚痴を言いながら千雨に王牙刀【伏雷】を渡す。

「見た目が派手ですが、凄まじい業物ですね。一体どれだけの歴史を積み重ねてきたのですか?」

きょとんとする千雨。この太刀は千雨がジンオウガを倒して得た素材で出来た、作られてから五年もたっていない新しいものだ。

「それにしては力強い念が内包されていますよ。ああ、悪いものではありません。むしろ神剣と言われた方が納得できるたぐいのモノです」

詠春の言葉を聞き、千雨は剣をよく見る。確かに詠春に言われた通り、清らかな何かをイメージさせる気が感じ取れた。

「お前も、一緒に戦つてくれてたもんな」

幾多の竜との戦いについてくれた愛刀をかざし、千雨は笑みを浮かべた。

「それじゃあ、フロイトつてやつを警戒

千雨の勘に何かが引っ掛かった。

「来たか!?

道場から飛び出した千雨は、辺りの気配を探る。いや、敵の狙いは木乃香。ならば木乃香のそばにいるべきだ。

「くそッ! 近衛はどこだ!」

詠春との訓練のために離れたことがあだとなつた。転移で移動し

続けるフヨイトラしき氣配に惑わされながら、詠春、マッコリと一緒に木乃香を探す。

本山の中には人々は石化されているのが見て取れた。クラスメイト達に割り当てられた部屋に行つたが、木乃香はいない。残りはみな石にされていた。

「違う、綾瀬がいない！」

「どこかにいるかもしません、一緒に探しましょう！」

移動しながら木乃香を探していく最中、学園長に電話をかけていた詠春が二つの人影を見つける。

「ネギ君！ 刹那君！」

「長！ 長谷川さん！ 無事でしたか！」

「ええ。それで今、このかは何処に？」

「さつきアスナさんと一緒にいたと念話で確認を取りました！ お風呂で合流する予定です」

「わかりました、急ぎましょ！」

「ニヤんかもうわけわかんニヤいニヤー 説明してる余裕ニヤんかニヤたそうちだから訳かニヤいけどニヤー」

「後でゆっくり説明してやる！」

詠春を先頭に、千雨達は風呂場へと向かった。

綾瀬夕映は朝倉和美のとつさの機転で逃げ延びていた。

先ほど長瀬楓たちに助けを求めるが、それまで何処にいればいいのだろうか考えながら走る。その途中で森の中で光を纏う人影を見つけた。

「紗奈さん！ 雷堂さん！」

「あれ？ 夕映ちゃんツスか？」

「み、皆がどういうわけか石にされて、助けてください！」

その言葉に一人は顔を引き締める。

「雷堂さん、行きましょ。……夕映ちゃんは、雷堂さんが安全な場所へ」

「「」の分だと安全な場所などなさそうな気もするがな」

「……そツスね。ではいつたん師匠と合流で」

「承知した」

雷堂が夕映を担いで、三人は森の中の開けた場所から移動を始めた。

三人が立ち去った後、大きな影が姿を現す。

それはバチバチと電気を纏いながら、狼のような形の巨躯を動かす、一匹の竜。

無双の狩人とも呼ばれたそれは、常に纏う雷光虫だけではなく、自らの声に応える、形無き者達を連れて移動を再開した。

長い夜が、始まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2233z/>

凄腕ハンター千雨

2011年12月16日20時45分発行